

2020年11月29日(日)／説教者：神谷武宏

説教：「だから、こう祈りなさい」

聖書：マタイによる福音書6:9～13

「主の祈り」は共同体としての祈りである。《だから、こう祈りなさい》(9 節)には、「あなたがたは」という語が隠れている。また、「主の祈り」には共同体としての「我ら」が6回も含まれ、教会としての祈りが強調されている。

神学者ティーリケは、主の祈りは「世界を包む祈り」と言っている。「我らの父よ」と言う時の「我ら」は私たちの家族、友人のみならず、キリストを信じる者も信じない者も、ひと時も忘れることの出来ない敵をも含む。ただ私たちは、私を苦しめたあの人、この人を思って「我らの父よ」と祈れるのか？ ひと時も忘れることの出来ない、あんなひどいことをした人を思って、「我らの父よ」と祈れるのか？ 祈れない。多くの場合、人は祈れないはずである。しかし、ゆえにこの「主の祈り」は、共同体としての祈りなのである。キリストの十字架の贖いによって罪赦されたこの者は、これ以上ないイエス・キリストの代価によって赦された者であった。とは言え、ひどいことをされた者は、やはり許すことの出来ない弱さがある。「主の祈り」は、その「弱さ」を踏まえて、あなたの席のお隣の方が、あなたのために「主の祈り」を執り成してくれる。ゆえに共同体として、教会としてこの「主の祈り」はある。

この「主の祈り」は別名「弟子の祈り」とも言われる。それは弟子たちがイエスに「祈りを教えてください」と願ったからであった。この「弟子の祈り」という言い方の中に、祈りは人間側のもので祈りは鍛錬によって築き上げられるものであるという意味合いが含まれている。確かに祈りは多少の訓練は必要かも知れないが、しかし、どんなにキリスト者が祈っているといってもユダヤ教徒やイスラム教徒の祈りには及ばないものであろう。まさに彼らの祈りのスタイルは、日ごろの鍛錬の成果である。

では、私たちの祈りはどうか？ 主の祈りで「我ら」とは「隣人」を含むと言ったが、ただ、ひと時も忘れることの出来ない、ひどいことをした人を思って祈ることは「弱さ」のゆえに祈れないもの。しかし「主の祈り」は、その「弱さ」を踏まえて、あなたの席のお隣の方が、あなたのために祈っている……。そして、イエスご自身もまた、「弱さ」を覚えるあなたの傍らに立ち、「天にまします我らの父よ」と祈ってくださっている。その傍らに立つゆえに、キリストはこの世に誕生してくださった。

私たちは、イエスとの出会いによって、「主の祈り」が与えられたことを、ご一緒に感謝して行きたい。今日からアドベント・待降節に入るが、「神我らと共に」という約束、幸いをくださったクリスマスを、喜びを持ってご一緒に備えて行きたい。(神谷)